

R-18
For Adult only



medium passion & cute a hermit joint project

JESUS II

ジーザス × ジーザス

JESUS II

Angel Beats® parody illustration book 2010 SUMMER



medium passion & cute a hermit joint project

JESUS II

シザス X シザス

JESUS II

Angel Beats' parody illustration book 2010 SUMMER

…合言葉は？

神も仏も——
天使も我が手中に

コンコン

カチカチ

ズンズン…

例のやつは
順調に進んでるか

当然ですよ…
僕を誰だと
思ってるんですか

ゆりっぺには
バレてないだろうな

カタカタ

ええ…
抜かりはありませんよ





まったく——

真夜中の作戦室に
二人して忍び込んで

…一体何をやって
いたのかしらね？



アンタたち二人が
私に隠れてコソコソ
密会していたのは
知っていたわ…

まさか……
天使の側についたって
いうわけじゃ
ないでしょうね——？



……

悪いけどパソコン……

あらためさせて
もらおうわよ

ちよつと：
アンタたち

一体なんなのよ
コレはっ！

コレは
…僕のお宝画像
コレクションです

俺たちのライフワークだぜ。
色んな写真を組み合わせて
毎日少しずつ…な

なんと言いますか…
常日頃から打ち込める
ものをさがしてまして

竹

ジュッ



しゃあない

のだ。

死後の世界といえど
やはり生産性のある生き方を
すべきだと思ひ至りー



ア

成仏の意味合いもかねて
2人で始めることにしたんだよ

ゆーろくう画像

藤

ふうん…

※



キサマら...

お：落ち着け！
話せばわかるっ！

ユラア

おちおち

なぜ！

俺を仲間に入れん!?



...もう
みんな氏んでくれ

終わる

なかあがき

こんにちははじめまして、菜澄と申しますー。
内輪で「エンジェルビーツが盛り上がりまして、つい勢いで本を作ることになりました（笑
正直、最初から最後まで「んん〜??」と言わされっぱなしのアニメだった気がしますw
なんだか話の展開に疑問を感じてばかりいたよーな気もするんですが、まあ自分の中では
色んな意味で大盛り上がりだったのも事実（笑）
なんだろう、ブッ飛び具合が快感だったのかな。
先輩からは「菜澄さん、鍵厨なんすかア〜?」と散々冷やかされまくりましたが、
あーだこーだ言いながらも最後まで楽しく見ることが出来ましたね（笑
良い意味でくすぐったいアニメでした。うん、ホントキーンな感じww

さてガルデモー。
「まあ始めくらい見してみるか」と、軽い気持ちで見始めた第1話。
『Crow song』が見事にブッ刺さったのが、このアニメを最後まで見続
けることになった大きな要因ですかね（笑
ショップにCD買いに走ったら、完売してお店に置いてないんですもん。ビックリ。
つーか曲の売れ行きは本当にハンパな〜ですな;;
ちなみに、個人的には岩沢ボーカルのほうが好みだったりします（´▽`）
もうちょっと曲数歌ってくれたら嬉しかったんですけどね。

個人的に一番好きだったキャラは、ゆりっぺ。
周りからは「なんでやねん」って顔されました。酷いや。
まああの子最後までヒロインって感じじゃなかったですし、わかる気はしますがね（笑
あとは岩沢とか、ひや子とか……相変わらずフルビュ〜ティ〜系に惹く弱いのは、
どの作品に転んでも変わらないみたいですが。気の強い子が可愛いよ！
ゲストのおさぎは「天使！天使！」とうるさいし（笑）、くらははユイにゃん一筋くさいので、
本の内容としては、ある意味バランス良く配分されたのかもしれないです。

さあ、まだ語りたことも色々あったんですが…。
いよいよタイムリミットのほうが近づいて来ましたよ（涙
実は文章書いてる余裕もないくらい、か〜なり切羽詰まってる状況だったりするんですよ;;
いかん、くらははやみぐ君にまで迷惑をかけるわけには…ッ！（汗
相変わらず朦朧とした意識の中で作業してますが、そろそろこの辺でゴールしたいと思います。
『大丈夫…印刷所くらいまでなら、歩ける…よ?（´ー`）』
…なんて馬鹿やってる場合じゃないや、外が明るくなってきた;;;;;
それじゃ、またどこかで見かけたら宜しくしてやってくださいませ!!
引き続き、次のページからも楽しんでってくださいね〜。
くらははにパトタッチ!!



ヒッハー！
天使ちゃん、マジ天使！
可愛すぎてもう、ぺろぺろぺろんちよ！

と、まあ毒されておりました。

中の人も可愛いよね！

byあさぎしん。



奏との一件の後、この世界に残る理由を失った戦線メンバーを成仏させようと決めた俺は手始めに「恋がしてみたい」というユイの願いをかなえることにした。

「とりあえずつき合ってくださいよ」というユイの軽いノリでつき合い始めた俺たちだったが何も進展がないまま一週間が過ぎようとしていた。

よくよく考えてみれば生きてた頃も恋なんてしたことのない俺たちがまともな恋愛なんて出来るはずがなかったのだ。

「そろそろキスぐらいしてくださいよっ！」
ある日の夕方、中庭でコーヒを飲んでみると、とうとうユイに怒られた。

「先輩、あたしのこと嫌いなんですか？」

「そんなことないぞ、彼女なんだし」
「でも、目の前にこんな悩ましいボデイがあるのに何もしてこないじゃないですかあ」
頼りない胸を両手で持ち上げながら騒ぐユイ

「悩ましいねえ……」
顔は可愛いけどセクシーな魅力には乏しいよな……

そんなことを考えている俺を尻目にユイは騒ぎ続ける。
「あー、分かったっ！先輩ホントは男の人に興味あるんですねっ！」

「んな、ワケねーだろ……」
「大体、こーいのは年上の男の人がリードするモンでしょうが！少女マンガとか読んで憧れてたんですよっ！」

「ギャルゲーとかでは女の子の方が積極的なんだけどな」
「むう……」

まあ本人がここまで言ってるんだ、そろそろ恋愛らしいことをするのもアリなのだろう。
これ以上、言い合うのも不毛な気がしたのでこの辺で折れることにした。

「分かった、場所移そうぜ……」
「はい、先輩っ♪」

飲みかけの缶コーヒをゴミ箱に捨てて中庭のベンチを後にした。
……ギャルゲーのような素敵な展開は来世に期待することにしよう。

夕方の校内は人影もなく静まりかえっている。
もともとこの辺りは昼間でもほとんど生徒が立ち入ることはない。

「よし、誰もいないぞ」
「保健室に連れ込むなんて、先輩もやる気満々ですねえ」

「ここにしろって言ったのお前だろっ」
「そうでしたっけ？」

「……まあここなら誰も来ないしちょうどいいだろ」

「ベッドもありますしねっ」

「一応、女の子なんだし少しは恥らえよ……」

「いいから、いいからっ♪」

部屋に入るとすぐにユイはベッドに腰掛けて目をつぶる。

「んー」

唇を軽く突き出しキスをねだっているようだ。

初めてのことに戸惑ったが俺もユイの隣に腰掛けてその薄い唇にそつと自分の唇を重ねた。

「んちゅ……っ」

唇を重ねた瞬間、ユイが身をこわばらせた。

「んんっ……」

ゆっくりと唇を開きその奥へと舌を進めユイの舌と絡める。初めてのキスが濃厚なディーブキスというのも変な気がしたがやってみれば何とかなるものだ。

「んちゅ……っ……んんっ」

小さな舌とさらさらとした唾液が絡みついてくるのを舌先で感じながら、手はユイの胸の方へと進める。

少し力を込めて揉んでみると下着の上からだろうか少し堅い感触だったが、心地よい弾力が手のひらに返ってきた。見かけより胸は大きいようだ。

「んふっ……ん……んんっ」

胸を揉まれるうちに力が抜けたのかユイをベッドの上に押し倒すような格好になってしまった。少し苦しげに声を漏らすユイから唇を離すと透明の唾液が細く糸を引いた。

恥ずかしそうに目を逸らすユイの首筋に鼻を押しつけ大きく息を吸い込むとシャンプーと女の子特有の甘い匂いの混じった芳香が肺を満たした。

「先輩のキス……さつき飲んでたコーヒの味がします」

その声にふと顔を上げるとユイが仰向けのままとろんとした目つきでこちらを見つめていた。
「上……脱がせてもいいか？」

無言のまま頷くのを確認してユイの体を起こし、制服を脱がせて可愛らしいブラを外すとぷるんと弾けるように真っ白な乳房が姿を現した。

豊かな膨らみの上にはちよこんと小さな突起が立っている。

「結構、胸大きいんだな」

「……あんまり見られると恥ずかしいですよ」
後ろから抱きしめるようにして揉んでいると手のひらに吸いつくような手触りで服の上からと

は比べものにならない柔らかさだった。

ゆっくりと揉んでいくうちに乳房の突起がびんと立ってきた。

その小さな突起を指で摘むとユイが激しく身を震わせた。

「んっ……あっ……乳首……だめえ……」

どうやら、乳房の感度がいらいらしいのでそのまましばらくコリコリと乳首を愛撫し続けた。

「あふう……んっ……なんかムズムズしてきました……」
愛撫するうちに疼いてきたのかユイはこちらを向き俺の膝に股間を擦り付け始めた。

いつのまにか、じつとりと湿り気を帯びていた下着が俺のズボンを汚していく。

「ん……あっ……んんっ」

保健室に連れ込むなんて、先輩もやる気満々ですねえ



ひゃあ…

せつ…先輩いそんなにみないで欲しいです

キス…してほしいです…

ん…ん…ん…

ん…ん…

ドキ

ドキ

ちゅっ

ちゅっ

気持ちよさそうに腰をくねらすユイを膝から下ろし下着をめくるとピンク色の肉襷が奥から溢れる愛液に濡れてテラテラと光っていた。

「ひあつ……ちよ、ちよつと先輩っ」

秘部を露にされて慌てるユイをなだめながら、下着を脱がせてその肉襷に軽く指を入れるとぬるぬるとした愛液と熱く柔らかな肉が指先に絡みついてきた。

「んあつ……んんっ……っ」

指先で軽く中を引つ掻いてやるとユイは身をよじらせ甘い声を上げた。

「あんっ……ああつ……んっ」

その声を聞くうちに堪らなくなった俺はユイの秘部にむしやぶりついた。

湿った肉襷の中に舌を這わせると汗と愛液の混ざった甘酸っぱい匂いが鼻を突いた。

「んんんっ……せんばいっ……そこ汚いですっ……んっ」

そんなユイの声も耳に届かず夢中で秘部への愛撫を続けていた。

肉襷の少し上、うっすらと生えた恥毛をよけると綺麗なピンク色をした肉芽が顔を出す。

そこに優しく舌を這わせるとユイがびくんと体を跳ねさせた。

「ひやうっ……あつ……ひっ」

肉襷の奥からは止め処なく愛液があふれてくる。

俺の股間もそろそろ限界だ。

「ユイ、最後までしてもいいか？」

「んっ……やさしく……してくださいよ？」

ユイをベッドに寝かせ自分のズボンを下ろすと肉棒は、はちきれんばかりに膨らんでいた。

「じゃあ、いくぞ」

いきり立った肉棒をつかんで肉襷の入り口へと導く、亀頭の先を入り口に当てゆっくりと腰を押し出すと肉棒は粘っこい水音を立てながらユイの中へ沈み込んでいった。

「あうっ……うう……っ」

しばらく進むと急に中がキツくなりユイが苦しそうな声を上げた。

「大丈夫か？ 痛いならやめとくぞ」

「平気ですっ……から……最後までして……っください……」

その言葉を聞き、腰を一気に押し出した。

「痛っ……くっ……んんんっ」

ユイはうっすらと目に涙を浮かべ破瓜の痛みを耐えている。

全身に力を入れていのか中の肉がきゆうきゆうと肉棒を締め付けてくる。

熱い肉のとろけるような感触に思わず声をあげそうになる。

「先輩に……あたしの初めてあげちゃいましたあ……」

目に涙を浮かべたまま微笑むユイの姿が愛おしくて汗ばんだ頬に軽くキスをした。

「先輩……動かしていいですよ」

少しでも不安が和らぐようユイの両手を握りゆっくりと腰を前後に動かす。

深く前後に腰を動かすと中の肉の柔らかな感触や天井のざらざらとした感触、コツコツと亀頭の先に子宮が当たるのが肉棒に伝わる。

「ああつ……あつ……あつ」

しばらく動かし続けるとユイの声が甘い媚声に変わってきた。

動きにあわせてじゅぶじゅぶと音を立て肉棒から愛液が掻き出される。

「んんんっ……あんっ……んんっ……っ」

粘っこい水音と甘い声が部屋中に響く、ユイはよだれを垂らしながら自分でも激しく腰を動かした。

「先輩っ……んんんっ……なんか来ますっ……んんんっ」

「俺も、もうっ」

肉棒に絡みつく柔らかな肉の感触と激しい締め付けで今にも意識が飛びそう。

「ゆ、ユイ……このまま中にだしてもいいよな……ッ」

「はう……せんばい、あつ……なかは……なかは……らめえ、んひやあ」

「中にだしちゃ……いやあつ、いやあつ……やああああつ」

ユイが激しく身を震わせるのと同時にユイの中に射精した。

目の前が真っ白になるような快感とともに大量の精液がユイの中へと吐き出された。

「んんんっ……ああつ……」

ゆっくりと肉棒を引き抜くと中から白濁した液体と破瓜の血の混じった薄ピンクの液体がいやらしく流れ落ちた。

ユイはまだ、ふるふると身を震わせ余韻に浸っているようだ。

「なかは……だめって……いったのに」

快感が治まらないのか空ろな目をしたユイが力なく呟いた。

そんなユイの髪を優しく撫で、軽いキスをしながらコイツと一緒にこの世界にずっといるのも悪くないのかもしれないな……

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ふと、そう思った。

ひゃあ…っ

せんぱいのが
はいつてきます…

んはあ

ゆ、ユイ…

このまま中に
だしてもいいよな…ッ

はあ

え…!?

ひつ…っ
せんぱいいつ
はう…なかは

なかは…らめえ
んひゃあ♡
中に出しちゃ…

はう♡はあっ
いやあっ…
やああああっ

はじめての行為から数日、何故かユイに呼び出され俺は再び保健室に向かっていた。

保健室の扉を開けるとユイが仁王立ちで待ち構えていた。

「こないだの借りは返してもらおうぞおおお、音無いいい！」

……そういえば、こいつバカだったんだな。

ここ何日かで忘れかけていた事を一つ思い出した。

「で？ 何なんだ？ こんなトコに呼び出して」

「だーかーらー、こないだの仕返しをするんですっ」

「仕返しって言われてもなあ」

あの日からのことを思い出してみたが思い当たることは無かった。

ユイとの距離は縮まった気はするがそれ以外はいつも通りだった。

「もう、すっごい痛かったんですから！」

「何の話だよ？」

「初めてエッチした時の話ですよ」

「あー」

確かに女の子は初めてるとき痛いらしいが、そんなこと俺に言われても困る。

「あたしは痛かったのに先輩だけズルいですよ」

「お前も気持ちよさそうだったじゃん」

「いやー、それはそうなんですけど後で考えると何かムカついてきちゃって」

「知るかよ……」

「いいから、脱げやオラアアアア！」

もうワケが分からない

どういいうわけか俺はズボンを脱がされ下半身を露にされていた。

「……ああもう好きにしてくれ」

下半身丸出しでは反論する気にもなれずこのまま好きにさせることにした。

「とは言ったものどうしようかねえ」

首を傾げながらぐにぐにと俺の肉棒を両手で弄るユイ

ぎこちない手つきがかえって俺の興奮を煽った。

「うわっ、わわっ 何か先輩の大きくなってませんかっ」

「そりゃあ、触れば大きくなるわなあ」

だんだんと膨張する肉棒に慌てるユイは何だか可愛らしかった。

「せ、先輩のこの前より大きくなってませんか？」

「そんなコトないぞ」

「こんなのがあたしの中に入ってたんですね……そりゃ痛いわ……」

硬く膨張した肉棒の前に息を飲むユイ

あんまり見られるのも恥ずかしいな……

「えーっと、どうしましょう？」

「じゃあ、服を脱いで口で気持ちよくしてみてくださいよ」

あたふたするユイが可愛くて少し意地悪したくなった。

「えええっ、何であたしまで脱ぐんですか？」

「その方が興奮するだろ？」

「今日の先輩、何か変態っぽいんです……」

ユイは少し考えた後、ゆっくりと制服を脱ぎ始めた。

脱ぎ終わると、まじまじと肉棒を見つめたあと口に含み丁寧に舐め始めた。

「んんっ……ちゅぶ……っ」

ぬるりとした感触と舌先の動きで鳥肌が立つような快感が全身に走る。

「ん……ちゅう……どう……ですか？」

あまりの快感にユイの頭を撫でながら頷くことしかできなかった。

「ちゅく……れる……っ」

亀頭から竿のほうに舌がゆっくりと這う。同時に柔らかな唇の感触が舌とは違った快感を生む。

我慢汁が次々に溢れてくるがすぐにユイの舌先に掬われ舐めとられてしまう。

「んふ……何か……ヘンな味ですね……」

そう言いながらも、我慢汁を吸い出すかのようにちゅうちゅうと亀頭に吸い付いてくる。

「ちゅう……ちゅ……まだまだ……出てきますね」

そのまま竿が口の奥深くまで咥えられる。そして、ユイは肉棒に吸い付きながらゆっくりと頭を前後に動かし始めた。

「んちゅ……ちゅ……じゅぶっ」

ねっとりとした唾液が肉棒に絡みつき首を動かすごとにユイの口の端から泡だつてあふれだす。

あふれた唾液が顎をつたって落ち徐々に床を汚していった。

「んっ……んっ……んくっ……っ」

手で竿の部分を支えながらだんだん動くペースが早くなっていく。

前後に動かすたびに肉棒が上あごや舌に触れ快感の度合いが増していく。動きながらも吸い付

弱まることはなくそろそろ俺も限界が近かった。

「ユイ……そろそろ俺……ッ」

そう言うのが限界ですぐに強烈な快感で腰の辺りの力か抜けた。

「んんんんっ……ぶはあ……っ」

気がつく俺はユイの口内へと射精していた。

と、同時に部屋の扉が開け放たれた。

「ねえ……」

聞き覚えのある声と共に姿を表したのは

「彼方たち……こんな所で何してるの？」

……奏だった。

「ててて、天使いいい！？」

いきなりすることに慌てるユイだったが、服を着てないことを思い出したのか布団の中に逃げ込んでしまった。

……俺はとりあえずズボンを探すことにした。

これが……
先輩のおちんちん

これを口にくわえて
気持ちよくして
あげるんだよね……？

ねえ……
彼方たち……
こんな所で何してるの？

ユイ……
そろそろ俺……ッ

んっ……

っ……

んっ……

んっ……

はははは
お。お。お。
天使！

「で、何してたの？」

服を着た後、ユイと二人で奏に詰問された。

「いやー、ほらアレですよマッサージ的な……」

いくらなんでもそれは無理があるぞユイ。

「音無君、あたしにもしてくれない？」

「え？」

ユイと二人で顔を見合わせてしまう。まったく意味が分からない。

「そんなにおかしいかしら？」

「いやあ、おかしいとかじゃなくていきなりだったから、つい」

「いやいやいやいや、どー考えてもおかしいでしょ先輩」

確かにユイの言うとおりだ

「あたしだって……そういうことに興味がない訳じゃないから」

奏はうつむき加減にそう呟いた。奏こんな表情を見るのは初めてだった。

まあ、奏は不器用な奴だしこんなもんなのかもしれない。

「よし、じゃあ3Pってヤツに挑戦ですわっ！」

ユイは何故かノリノリで服を脱ぎ始めている。仕方がないので奏をベッドの方まで連れて行き服を脱がせることにした。

ゆっくりと制服と下着を脱がすと陶器のように白い肌が目の前に広がった。

小振りだが形の綺麗に整った胸とうつすらとしか毛の生えていない恥部に目を奪われる。

「やつ……んんん……」

奏の体に見とれていると突然ユイが奏の胸に飛びかかった。

「ほらほら、先輩も早く脱いじやつてくたさいよ 天使の相手はあたしがしときますからっ」

「いやっ……ちよつと……くすぐりたいわ」

女の子二人がじゃれあうのを聞きながら服を脱ぎ終えるとユイが奏の上に覆いかぶさりその小さな乳首を丹念に愛撫していた。

「んんん……ああっ……」

ユイに可愛らしい乳首を攻められ、か細い声を出す奏の頭を撫でてキスをする。

「んんん……ちゆく……っ」

舌を入れた瞬間、小さな口でちゅうちゅうと舌先に吸い付いてきた。

胸はユイが弄っているため秘部を攻めることにした。

下腹部をやさしく撫で、そのまま手を下のほうに進める。ほんの少しだけ生えた恥毛に隠れて肉芽がぴんと立っていた。

「んあっ……っく……音無くん……そこは……」

ユイの時よりも反応がいい。どうやら奏はここが弱いらしい。

指で少し肉芽を摘み皮に隠れた部分を露出させて、そこを舌先でやさしく愛撫する。

「あ……あん……そこ……んんん……ダメ……っ」

コロコロと肉芽を舌先で転がしていると小さな割れ目の奥から愛液が徐々に溢れてきた。奏の秘部は肉襞というよりも割れ目といった感じで入り口はぴたりと閉じている。

溢れる愛液を塗りながら慎重に指をいれてみると中はうねうねと動き指を奥へ奥へと導いた。

「ん……んん……っ」

指を入れるだけでも苦しいのか奏は左右に身をよじらせている。

「先輩、あたしの時みたいに一気にガーツと行っちゃってくださいよ」

「いやいや、奏はお前と違って繊細なんだから」

「あうう……今のは地味に傷つきましたよ」

腹いせのつもりなのかユイは奏の乳首をつねる。

「やつ……んんん……乳首……っねっちやだめえ……っ」

「ほーら、全身性感帯ですぜこの女」

「ユイ……喋りがオッサンみたくなってるぞ……」

二人で愛撫した甲斐があつてか奏の秘部もだいぶほぐれてきたようだ。

「奏、そろそろ入れるぞ」

「来て……音無くん……」

肉棒を入り口に当てそのまま一気に奥まで貫いた。

「い……痛あ……っんん……っ」

痛みに耐えるためなのか奏がぎゅっつと俺の体にしがみついていた。

そのままゆっくりと腰を動かし続けると奏もよくなってきたのか甘い声を上げ始めた。

「んんん……あっ……あっ……あんん」

奏の中は狭く痛いぐらいに肉棒全体をきゆうきゆうと締め付けてくる。暇そうにしていたユイが再び奏の上に乗る腰を擦り付けながら愛撫を始めると中の締め付けはさらに強くなり奏の体がガクガクと震えだした。

「あふう……んんん……音無……くん……あたし……何か、へん……なのっ……」

そろそろ俺も限界が近いので腰の動きを速める。

「んんん……んんん……ダメっ……あっ……あああああああ……っ」

奏が激しく絶頂に達すると同時に射精を迎えた肉棒を勢いよく引き抜く。

白濁した大量の精液がユイと奏の股間やお尻を汚した。

「んんん……んんん……あん……あああああ……んんん」

奏の体に腰を擦り付けていたユイも絶頂したのでろう、ぐつたりと奏の上に身を横たえていた。汗と精液の匂いの混じった部屋で二人の息遣いを聞きながら射精後の虚脱感に浸っていた。

二人とも疲れたのか俺の腕にしがみついたまま眠ってしまったようだ。

可愛らしい寝顔を見ながら、俺はずっとこの世界が続けばいいと思っていた。

何せ時間は無限にある。今がこんなに幸せならそれでいいじゃないか……

そう考えると気が楽になり睡魔が襲ってくる。

すつと一緒に居たい、そう願えば消えることもない……簡単なことだ。

そんなことを考えながら目を瞑ると徐々に意識が薄れていった。

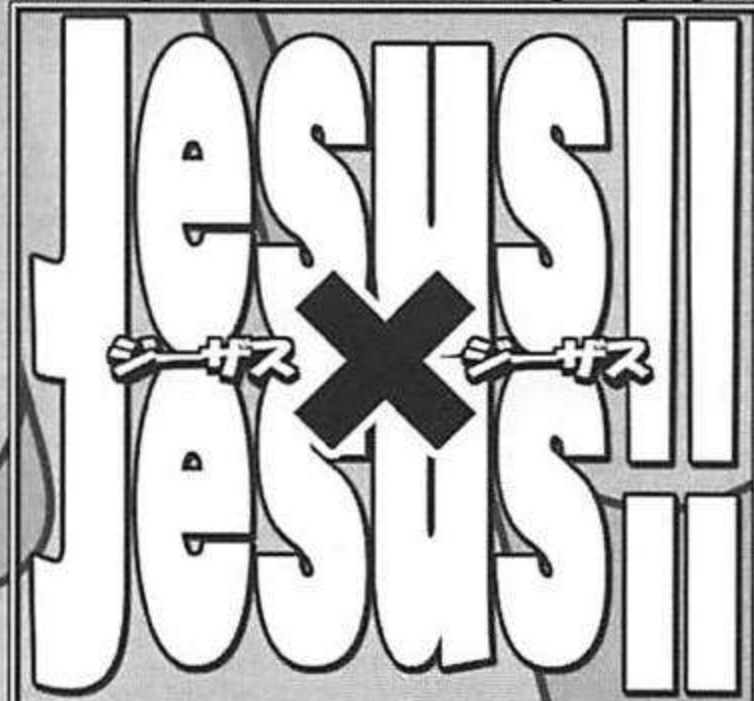
この世界に影が現れ始めたのはそれから暫くのことである。

んっ…あつ♡
先輩っ…んあぁ
もうらめっ♡

んっ…んくら
はぁ…すごいっ
やぁぁぁ…♡

はう♡ああつ
んあぁあぁ…
あぁああつ♡

medium passion & cute a hermit joint project



Angel Beats! parody illustration book 2010 SUMMER

【発行】

medium passion & Cute A Hermit

【発行日】

2010年8月15日

【印刷】

くりえい社

【著者】

菜澄 桂

くらは / みく

URL: <http://cuteahermit.net/>

【ゲスト】

あさぎ しん

URL: <http://c10005341.circle.ms/cr/CircleProfile.aspx>

無断転載・転用・アップロード禁止
未成年者購読禁止

R-18
For Adult only



medium passion & cute a hermit joint project

Jesus II
Jesus II

Angel Beats' parody illustration book 2010 SUMMER